

明治期のアメリカにおける日本製絹ハンカチの流行 青葉学園短大 大久保春乃

目的 横浜で生産されるスカーフは、現在日本全国の90%のシェアを占めている。スカーフ生産の端緒は「絹ハンカチ」として輸出が開始された1885（明治18）年にさかのぼる。横浜の山下町では、絹ハンカチの注文元である外国商館に隣接して輸出絹物売込商が事務所を連ね、アメリカやヨーロッパ各国への輸出を拡大していった。本研究では初期の絹ハンカチの製作技法、形態および輸出状況をまとめると共に、日本国内と、主な輸出先であるアメリカでのハンカチの流行を明らかにするものである。

方法 文献資料として、横浜貿易新聞、ニューヨークタイムズなどの日米の新聞の他、当時の随筆、小説、回想録を用いた。さらに実物資料として、横浜のスカーフ商に伝えられているハンカチの製作見本を考察に加えた。

結果 ハンカチの素材は羽二重と縮緬であった。大きさは一辺が12～22インチ程の正方形が多く、ドロンワークで縁どりされていた。1890年頃から木版捺染の技術が導入された他、スカラップや、刺繍によるイニシャル入りなど工夫が凝らされていった。横浜ではハンケチ女と称する縁かがりの内職をする女工達が、仕事の余得で手に入れたハンカチを首に巻く、独特の風俗が生まれた。一方アメリカにおいては1886年から新聞広告に、プレゼント用の「日本製絹ハンカチ」が登場する。絹ハンカチは女性の持ち物として、また男性の胸元を飾るアクセサリーとして活用されていた。そこには日本の絹を持つことによって東洋の神秘を身近に感じようとする特別な感情が込められている。ハンカチは一般の人々が、流行の日本趣味を現実のものとする上で、入手しやすい、手頃な製品だったのである。